

中国人の日本語作文コンクール

日本僑報社など主催
／アジア調査会後援

中国で日本語を学ぶ青少年を対象とした「第12回中国人

の日本語作文コンクール」(日本僑報社、日中交流研究会主催／アジア調査会後援)が行われ、最優秀賞(日本大使賞)1作品、一等賞5作品、二等賞15作品、三等賞60作品が決まりました。今回のテーマは、①訪日中国人「爆買い」以外にできること②私を変えた、日本語教師の教え③あの受賞者は今——先輩に学び、そして超えるには?——の三つ。中国各地の大学や専門学校など189校から前回の4749作品を大幅に上回る5190作品の応募がありました。最優秀賞1作品と一等賞5作品を掲載します。いずれも完璧な日本語で書かれ、その豊かな感性と質の高さに驚かされます。中国人の「爆買い」を中国人自身がどう見ているのかを含め、興味深い内容です。

なお今回のコンクールの入賞作は「訪日中国人「爆買い」以外にできること」「おもてなし」日本へ、中国の若者からの提言」(段躍中編 日本僑報社、2000円＋税)にまとめられ出版されています。(編集部)



最優秀賞(日本大使賞) テーマ:
私を変えた、日本語教師の教え
二人の先生の笑顔が私に
大切なことを教えてくれた
白宇(蘭州理工大学)

大学の専門が決まった日のことは今でも覚えている。私が遠く蘭州まで行って日本語を勉強すると聞いて、友達は何馬鹿にしたように笑った。両親の「もう一年、浪人して頑張る?」という言葉が、傷だらけの私の心に止めを刺した。浪人する勇気もなかった私は、入学後、専門を変えることにだけに望みを託した。蘭州まで付き添ってくれた母は私の将来を悲観して、帰りの電車で泣き続けたという。2012年、小さな島をめぐって中日関係が最悪となった、その年のことだった。

大学の初日、初めての授業にやってきたのは、なんと日

本人の先生だった。それまで日本人と聞いて頭に思い浮かぶのは、戦争ドラマで見たあの憎らしい顔だけだった。ところが、教室にやって来たのは可愛らしい女性で、最初はクラスメイトだと思った。教壇に立つと、彼女は知らない言葉で話を始めた。唯一聞き取れたのは「早上好(おはようございます)」だけ。英語と、少しの中国語を黒板に書いて交流した。彼女は最初から最後までずっと笑顔だった。なんだ、怖くないんだ、日本人も。授業の後には自分で黒板まで消して、「また明日ね」と言うと、また微笑んだ。

その先生は丹波江里佳と言い、ご主人も先生だった。姓が同じなので、江里佳先生、秀夫先生と名前と呼んだ。先生は「子どもみたい」と笑ったが、なんだか親密な感じがして、その呼び方が好きだった。私は、もうちょっと日本語を勉強してもいいかなと思った。

その後、江里佳先生と相互学習を始め、私は日本語、先生は中国語で会話を重ねた。私が大事な試験や大会を控えた時は、先生からたくさんのアドバイスとパワーをもらった。一年が終わる頃、私の成績は学年で一番になっていた。いつの間にか、専門を変えようという気持ちはなくなっていた。

ある日、秀夫先生から呼び出され、江里佳先生が突然帰国することになったと聞かされた。もう、蘭州には戻らない。その瞬間、私は言葉を失い、目からは涙が溢れ出した。

他人に弱みを見せることが何より嫌いだっただけの私が、何も言えずに、ただ泣き続けた。ただ一人の日本人の前で、ただ一人の日本人のために。

江里佳先生が帰国した後は、秀夫先生と相互学習を続けた。今だから言うと、最初は江里佳先生には誰も代われなと思っていて。秀夫先生は私達の授業を担当したことがなかった。冗談を言い合うことも少なかった。やっぱり江里佳先生のほうがいい、とこっそり思った。

去年の五月、蘭州で大きなスピーチ大会が行われることになった。地区予選で優勝すれば日本での決勝に行けると聞き、とてもワクワクした。日本で、また江里佳先生に会える! しかし、参加を決めてから大会まで一カ月もなく、まだ原稿もなかった。思い切って秀夫先生に指導をお願いすると、先生は快く引き受けてくれた。「でも、私が指導する以上は厳しいよ?」「全力を尽くす」、それが唯一の、そして絶対に守ってほしい約束」という秀夫先生に、私はドキドキしながら頷いた。

それから毎日、秀夫先生と夜遅くまで練習した。発音から、アクセント、イントネーション、表情、身振り手振りまで、二人で一緒に考えた。大会当日、私の優勝が決まった時、先生は誰よりも嬉しそうに微笑んでいた。その笑顔を見た瞬間に気づいた。秀夫先生もまた、かけがえのない存在になっていたのだ。

東京の決勝では全力を尽くしたものの、結局、私が優勝することはなかった。周囲は決勝に進めただけで十分だと言ってくれたが、内心悔しくてたまらなかった。そんな私の性格をよく知る江里佳先生がくれた長い応援メッセージは、私の一生の宝物になった。

思い返すと涙が出てくる。四年間、私を支え続けてくれた先生方。辛い時、苦しい時、私はいつも二人の笑顔を思い出す。すると、また次の一歩を踏み出す勇気が湧いてくる。今年、私は大学院へ進学する。専門は日本語。今なら相手が誰であろうと、私は胸を張って言える。「私の専門は日本語です」と。

(指導教師 丹波秀夫・丹波江里佳)

白宇(はく・う) 1994年、安徽省出身。蘭州理工大学日本語学科4年。この作文コンクールへの参加は今回が初めて。「大学入学前は日本のことが大嫌いだった私が、先生方のおかげで日本語が好きになった。このコンクールの開催を知ると、迷わず『先生』のテーマを選んだ。入賞したら、4年間ずっと支えてくれた先生方に恩返しができると思ったから。コンクールを通じて、先生方との深い絆を形にすることができた。そして改めて努力の大切さを知った」という。2016年9月、南京大学大学院に進学。趣味は、卓球とギター。



一等賞
テーマ：訪日中国人、
「爆買い」以外にできること
「サヨナラ」は言わない
郭可純(中国人民大学)

「両親に、一週間の日本旅行で一番印象的だったのはなにか聞いてみて」。中井さんは微笑みながら、そう尋ねた。「そうですね。やっぱり茶道の点前を学んだことや、和服を着て花見小路通りを歩いたことですね」と私は両親の答えを訳した。

旧正月の連休の最終日、両親の日本旅行が終わりを迎えるようとしていた。神戸の浜辺で、初対面の両親と中井夫妻は、私の通訳を通して話が弾んでいた。

中井さんは以前、私が神戸に短期留学した際にお世話になった「日本のお母さん」だ。彼女とはネット上のホストファミリー紹介プログラムを通して知り合った。今回、私が両親と一緒に関西で旅行するのを聞いて、わざわざ一日を空けて、ご主人とともに神戸を案内してくれたのだ。

「青空の下、絵本みたいな景色に見惚れ、隅々まで気配りが行き届いたサービスを受けた。おまけに日本の伝統文化の体験や、友好的な日本人の方々との交流もでき、こ

のせない旅だったわね」。わさび入りのお寿司を一口食べながら、母はかなり深遠な言葉を口にした。その場でなかなかうまく通訳できなかったが、中に込められている感謝の気持ちはきっと中井さんに伝わっただろう。

「よかったわ。郭さん一家の旅行は『爆買い』ならぬ『爆体験』という感じだったわね。私の中井さんの言葉を訳すと、みんな笑い出した。今回両親のガイド兼通訳を担当した私は、いわゆる「爆買いツアー」とは異なる何か日本ならではのことを両親に体験してほしいと思い、前もって中井さんに相談した。「一回きりじゃなく、また何度も行きたいって、両親が中国に帰った後そう思ってくれればいいね」と中井さんはガイドブックを参考にしながら、観光バス券の取り方や、文化活動の予約方法などを教えてくれ、旅行計画を練ってくれた。

両親が京都に辿り着いたその日に、私たちは一つ目の目的地である茶道教室に向かった。ひっそりと静まり返っている茶室で、両親が先生の点前にじっと目を凝らし、見よう見まねでお茶をたてた。茶道が終わった後、「さすが京都。落ち着いている雰囲気のおかげで旅の疲れが全部吹き飛んじゃった」とほろ苦い抹茶の余韻に浸るかのように感激していた。また、清水寺に行った日には、母と一緒に和服に着替え、古きよき町で下駄をカラコロと鳴らし、まるで日本人女性のような一日を過ごした。そして最後の夜。

神戸で中井さんと会い、浜辺でご飯を食べながら、日本旅行の感想や、親として子育てと老後の生活についての世間話、一衣帯水の日中関係や同文同種の日中の歴史まで、話が尽きなかった。胸襟を開き、国境も言葉の壁も越えて、私の二組の「両親」の間に、ご縁の橋が掛け渡されたのだ。「次回会うとき、中国語で話せるように頑張るわ」。中井さんは私を見つめ、「郭さんのご家族も、ここを第二の故郷として、また戻ってきてください。待っているわ」と私の肩を軽く叩いた。

「一期一会」という言葉が日本で好まれているようだが、私は今回この言葉を避けたい。なぜなら私たち家族にとつて、日本での旅は今回一度きりのものではなく、また戻ってきて、大切な人と再会したいからだ。

観光地を大雑把に見て、デパートに押し合いながら入ること以上に、より意義深いことは多くあるはずだ。伝統文化の体験はもちろんのこと、機会があれば、日本人と交流し、友好の絆を結ぶことは何よりかけがえない思い出になる。そして、そんな生きた体験や交流によって心に生まれる「また行きたい場所、また会いたい人」こそが、旅の最上の「お土産」ではないかと思う。より多くの訪日中国人が、お店では買えない自分だけの「お土産」を見つけ、持ち帰ってくれたら、と思う。

神戸駅前、二組の「両親」が手を振りながら、「再見」

と繰り返し言い合った。この「再見」は、決して「サヨナラ」と訳すべきではない。「またお会いしましょう」という言葉が、通訳である私の、この旅での最後の仕事となった。

(指導教師 大工原勇人)

郭可純(かく・かじゅん) 1995年、浙江省出身。中国人民大学外国語学部3年。日本語学習歴は大学に入学してから3年ほどだが、この日本語作文コンクールへの参加は2015年の第11回に続いて2回目、受賞も前回2等賞からの躍進となった。今回はテーマを見た瞬間に「知り合いの中井さんのことをヒントに書こう」と即断。書くにあたっては「どのようにわかりやすく書くか」悩んだが、構成を練り、何度も推敲し、最終稿ができた時には大きな達成感を覚えたという。「この経験は私にとって成長のための一助になった」。趣味は、写真、旅行。



一等賞
テーマ：訪日中国人、
「爆買い」以外にできること
浪花恋しぐれ
張凡(合肥優享學外語培訓學校)

雨の横丁。法善寺。目の前に、小雨に濡らされた路地裏が伸びていた。私の予想と異なり、人通りがなく、静かな場所だった。私は友人と一緒に携帯電話の地図をたよりに、予約していたお店を探した。やつのことで石の壁にあった看板を見つけた。

演歌が大好きな私は、去年日本に行けることが決まり、どうしても法善寺を見に行きたいと思った。「雨の横丁 法善寺 浪花しぐれか 寄席囃子 今日も呼んでる 今日も呼んでる ど阿呆春団治」と、名曲「浪花恋しぐれ」を聞くたびにそこで歌われている日本文化の美しさに心酔しながら、「法善寺」「横丁」とはいつたいどんなところなのか、歌詞の背景にはどんな物語があるのか気になった。そこで、この記念すべき初の日本旅行を大阪から始めることにした。

緊張しながら暖簾をくぐると、着物姿の女将さんが笑顔でカウンターに案内し、丁寧にメニューを紹介してくれた。

私たちが初めて日本に来たと知り、すごく驚いていた。「どうやってうちを知ったんですか」と聞かれて、少し笑いながら「実は演歌なんです。『浪花恋しぐれ』が大好きで、その歌詞に横丁が出てくるので」と答えた。話を聞いていた大将も驚いて話しかけてくれた。「ああ、都はるみさんの歌やったっけ。大阪弁がいっぱいあったけど、意味わかりますか」、私は「まあいろいろ調べたんで」と答え、以前から秘かに勉強していた大阪弁を使ってみた。「おっちゃん、これなんぼ」「やりよるな」と、このやり取りに周りにいたみんなが笑った。

歌詞に出てくる「ど阿呆」と「春団治」についても聞いてみた。「ああ、『ど阿呆』やな、『阿呆』のことやで。阿呆をもっときつくした言い方やな。春団治はそんなときの落語家で、スーパースターやったんやで」と大将が親切に教えてくれた。寄席囃子は三味線や笛の演奏だということも大将から聞き、「歌詞の中で『呼んでいる』のは、落語家の名前なんですね」と答えた私は、劇場全体が聴衆の笑いに包まれ、みんなが「春団治、ええぞお」と声を上げている情景が目の前に浮かんできた。春団治は妻に支えられながら、一歩ずつ壮大な夢を叶えた。そして、雨の横丁で落語家が傘をさし、二人が寄り添って帰るところも見えてきた。歌に込められた落語家の夫婦愛をようやく理解できた私は、とても温かい気持ちになった。

あの料亭での時間を思い出すたびに今でも何とも言えない感慨深い気持ちになる。最近、日本では「爆買い」という言葉をよく耳にと言う。私も例外ではなく、買い物用のスーツケースを二つ準備し、他の多くの中国人と同じように「大人買い」を超える量の買い物を楽しんだ。しかし、急ぎながらいくつものデパートを回った後、疲労感が強く残った。せっかく日本に来て、爆買いだけしかなければ、忘れたがたい思い出を作ることには難しいと思う。日本へ行く時には、その高品質な製品だけでなく、人の心を引き付ける場所にも目を向けてみてほしい。誰でも好きな日本のドラマやアニメがきつとある。その舞台となった所へ行くのはどうだろうか。自分の足でその場所へ行き、その情景を感じる。鎌倉高校前の踏切で、「スラムダンク」のエンディングソングのような写真を撮る。香川県高松市の防波堤へ行き、「世界の中心で、愛を叫ぶ」で二人が見つめていた夕日を眺める。「ラブストーリーは突然に」と一緒に、リカちゃんと完治くんがデートした代々木公園を歩くなら、リカちゃんの優しい笑顔がそこにはあるかもしれない。感性を働かせて「自分の知らなかった日本」を味わうと、「爆買い」では見落としてしまいがちなものを得られるはずだ。私にとって、それは大将や女将さんとの会話であり、その料亭の通りの独特な雰囲気という記憶だ。一週間の旅行は瞬く間に過ぎ去った。荷物も、そしてそ

れ以上に思い出もいっばいだった私は、帰国の飛行機に乗るときに、「また来るで」と心の中でつぶやいた。

(指導教師 汪彩鳳、水野晴哉)

張凡(ちよう・ほん) 1989年、安徽省出身。合肥優享学外語培训学校に在学。この作文コンクールへの参加は第11回に続いて2回目、受賞は初めて。日本語は大学時代から培训学校(研修学校)で学んでいるが、日ごろ日本語を使う機会是非常に少ない。そのため、このコンクールは自身にとって「特別なもの」であり、今回の参加で「ライティングのレベルを向上させることができ」と喜ぶ。「これからも一歩一歩、日本語の勉強を続け、将来は日本で仕事をするのが夢」。趣味は、スポーツと音楽。



一等賞
テーマ…
私を変えた、日本語教師の教え
私を変えた、
日本語教師の教え
張君恵(中南財經政法大學)

私は「頑張れ」という言葉が嫌いだった。この言葉自体にも、この言葉を口にする人の気持ちにも、この言葉を聞いて妙に頑張っている人の姿にも、嘘くささを感じてしかたがなかった。それまでの年間、そこそこ努力して、そこそこの結果を出して、そこそこ満足していた私にはその意義がわからず、そのわけを明確に体現している大人にも出会わなかった。もし5年前中村先生に出会わなかったら、今の私もきっとあのままだっただろう。

「一流大学の学生である皆さんは、自分の日本語のレベルはどのぐらいだと思いますか」。着任早々の授業で、先生は私たちに問いかけた。当時は深く考えもせず、もちろん一流レベルだろうと答えた。「日本語のレベルは出身校と何の関係もありません。永遠に学歴で人を判断しないこと。そして、永遠に自分のレベルに満足しないこと」と言った先生は少しがっかりしているように見えた。先生は以前、武漢の中等専門学校で6年間教えていたそうだ。必死に学

歴の縛りから抜け出そうとしていた彼らと比べ、受験の結果で嫌々日本語を学ばされていた私達はいかにも物足りなく見えたことだろう。

その後も授業のたびに叱咤激励を続ける先生に私は思い切つてなぜ頑張らなくてはいけないのかと疑問をぶつけた。「別に頑張ることが目標じゃないよ。私には目標があつて、それを実現させたいと強く願っているから、そのために必要な手段を講じているだけ」と先生は事もなげに答えた。「自分が何をしたいかはつきりわからない人には頑張るということの本当の意味は永遠にわからないだろうね」。いつもながら先生は明確だった。

「とにかく先生は自己責任の連続で、成功しても失敗しても、自分のおかげで自分のせいなんです。成功したすべし自分も失敗したダメな自分も全部自分そのものなんです」。授業中、先生が放つ言葉は学生達に価値観、人生観、世界観、国際化とは何か深く考えさせる。それまで受験勉強以外のことをしつかり考えたことがない私達にはどれもが難しい課題だ。先生の授業をきっかけにして、私は20年間生きてきて初めて思う存分に自分と対話ができた。自分は他の誰でもない。私は私なんだ。だから自分の意思で目標を具体化し、それに向けて後悔がないように頑張らなければいけない。私は先生のエネルギーに惹きつけられ、いつも先生のそばにいたようになった。

「私は成功の反対は失敗ではないと思います。成功の反対は『何もしない』です。新しいことへの挑戦に失敗と変更はつきもの。苦しみの中にこそ楽しみの種があるんです」。この言葉どおり、先生はいつも何か新しいことに挑戦し、苦しみながら楽しんでいる。あることがきっかけで、2年前から先生と一緒にネットラジオ番組をやることになった。先生がディスクジョッキーで、私が編集を担当している、今では日本語学習者の中で、結構人気があるラジオ番組だが、月に3回ぐらいの更新は決して楽ではない。なかなかアイデアが浮かばず、締め切りに追われることはよくあることだ。そんなとき、私はいつも中村先生の「頑張ろう」という言葉に励まされて、期待に応えようと頑張っている。

「何かをやるときには一生懸命、まさにこれしかないと思つてやるのが大切です。私も教師を一生一筋の一本道と決めた以上、これからは愚直にこの道を進んでいきたいです」。これは、23年間も教師の道をぶれなく歩んできた理由を尋ねられた時の先生の答えだ。自分軸で生きるというのはどれだけ大変で素敵なことだろうかと思感した。全力を尽くしている先生に心から「頑張れ」とエールを送りたくなった。

今の私には「頑張る」とことは何かはつきりわかつていいる。これからも世の中に中村先生の言葉を届けていきたい。

先生の熱い言葉は私だけではなく、きつと中国の迷える若者たちを大きく変えていくに違いないのだから。

(指導教師 森田拓馬)

張君恵(ちよう・くんけい) 1991年、湖北省出身。中南財經政法大學外國語學院大學院1年。この作文コンクールへの参加は今回が初めて。受賞の感想は「大変うれしく、光栄に思っている。正直なところ受賞したと聞き、驚きとうれしさ、感謝の気持ちとともに責任も強く感じた。この受賞は今後、作文コンクールに応募する後輩たちの励みになる一方、私自身は彼らの誇りとなる先輩であり続けなければならない。そのため身の引き締まる思いがしている。これからさらに上を目指し、精一杯がんばりたい」。将来は、日本語教師になるのが夢だ。趣味は、ネットラジオの番組制作。



一等賞
テーマー
私を変えた、日本語教師の教え
日本語の手紙
張影玲(南京農業大學)

試験終了を知らせるベルが鳴った後で、私は解答用紙に間違いを見つけました。先生方が用紙を集め始めました。私の席に来るまでには時間があります。すぐ修正しなければならぬ、そう思っ一生懸命に書き直しました。あと少し、説明を加えようとしていたところ、ポンと誰かが私の頭を叩きました。顔を上げると、手に丸めた試験用紙を持った石原先生が顔色を変えて私の前に立っていました。「試験は終わりました、もう書かないでください。あなたに残りなさい」。先生の語気は強く、怒っているように見えました。

最後の一人の学生も出て行って、教室の中は先生と中国人の先生、私の三人だけです。先生は何も言わず私を見えています。雰囲気が非常に微妙で、私はちよつと緊張していました。しばらく沈黙した後、先生は私の行為を責め始めました。カンニングだと言うのです。しかし、こんなことはカンニングには当たらない、その時の私はそう思っていました。

ました。私は他人の解答を見たものではありません。自分で自分の間違いを見つけて、解答用紙が回収されるまでの時間を利用して書く事の、一体なにが問題なのか。抑えないで、私はそう言いました。

先生は私の話を聞いたあと、ひとつの問題を私に出しました。「試験の規則は何か」。何も答えられない。「試験時間を超えて解答を書くことは許されていません。他人の答えも見ることと同様に不正行為です」。先生は真剣な表情で言いました。

私は人格を否定されました。先生は無理やり不正行為を探しているようです。自尊心を傷つけられ、涙を流さずにはいられません。辛くて悔しくて泣き続けました。

泣き続ける私に先生は「午後の試験はありますか」と尋ねました。泣いているから上手に返事ができません。「今日はここまで、帰って反省してください」。そう先生に言われて寒い気持ちのまま帰りました。

寮に帰っても、気持ちは高ぶったままです。昼寝をしようと思っても、先生の話を思い出して眠れない。そんな時に、先生からメッセージを受けました。「信頼しているから叱りました、泣きたいのは私の方です」。そう書いてあります。そして、次の試験に向けての励ましの言葉がありました。

今でも、先生のメッセージを読んだ時の感動を忘れるこ

とができません。先生の優しさに感謝しながら、自分の態度を深く恥じ入りました。謝りもしない私に先生はメッセージを送ってくださいました。

冷静に考えてみれば、簡単な話です。試験の規則に違反すれば、後で何を説明しても言い訳です。不正を不正とも思わないのは、それが私の中で当たり前になっていたからです。私は、ばれる心配すらしていませんでした。先生に指導されなければ一生分らないままだったでしょう。

以前先生が話してくださったことを思い出しました。先生の教え子が日本に留学し、焼肉屋さんでアルバイトをしていた時のことです。焼き網を洗い終えた直後、店長さんに「洗っていない」と言われたそうです。先生に教えられていた彼は、直ぐに残っている汚れに気付く「すみません」と言うことができました。汚れが残っていれば使い物になりません。仕事をしていないのと同じことです。

私なら、事の本質に気付くことなく「私は本当に洗いました、嘘じゃありません」と、洗うという作業をしたことを強調していたと思います。そして、自分がやった仕事を無かったことにされたはずと憤慨し続けたはずで

翌日、物事の本質を教えて下さった石原先生に感謝の手紙を書きました。生まれて初めて書いた日本語の手紙です。間違いだらけですが、一生懸命書きました。綺麗な封筒を用意し、先生に手渡しました。先生は何度も何度も領きな

がら読んでくださいました。そして、あの手紙を今も机の上に飾ってくださいます。それを見るたびに、少しの恥ずかしさと共に感謝の気持ちが甦ってきます。

(指導教師 石原美和)

張彩玲(ちよう・さいれい) 1995年、安徽省出身。南京農業大学外国語学部日本語学科3年。この作文コンクールへの参加は今回が初めて。受賞については「予想外だったので驚いたが、本当にありがたい」と喜ぶ。なぜ受賞できたか振り返ると「(日本語学科の)会話や日本文化など様々な科目で作文を書いて発表してきた。その『毎日の積み重ね』があったから」と分析。これからも指導教師の石原美和先生からの「書くことは生みの苦しみですね。大学で頑張った思い出は、あなたを励ましてくれるでしょう」という言葉を胸に「がんばりたい」と意欲を語る。趣味は読書、旅行、エッセイの投稿。



一等賞
テーマー…
私を変えた、日本語教師の教え
私を支えてくれた、
もう一人の一人ぼっち
金昭延(中国人民大学)

大学二年生になる前の夏休み、ある先生に出会って、私は変わり始めた。

村内先生、私に光と希望をくれた先生である。

以前の私はずっと一人ぼっちだった。「ねえねえ、あの子ってさ、勉強ばかりしてんじゃない?」「ある意味で『すごいね』『あれじゃ、本の虫だよ』。中学の時からよく言われた言葉だ。そう、私は勉強しかしていなかった。子どもの頃から入試に追われ、両親にも先生にも「今、勉強しなければ、将来困るぞ」「とにかく今は勉強に集中しろ」などと言われ、苦しんでいた。もちろん、私だってテストでいい点数をとるだけの勉強マシーンになったわけではない。でも、子どもの私は大人のプレッシャーには勝てなかった。

気がつけば私は、流行には全然関心がなくなり、周りの人にもどう話しかけたらいいのかも分からなくなっていた。大学に入ってから、周りからの印象はただ「冷たい」だ

け。皆の輪に入りたいのに、どうしてできないんだろう。もう嫌だ。そんな自己嫌悪に陥るのを避けるために、さらに勉強に取り組んだ。勉強は努力すればそれなりの成果が出て、絶対裏切らない。だから安心できたのだ。名門大学に合格した代償に、私は寂しくておかしくなってしまうようになった。

そんな私を救ってくれたのは村内先生だった。吃音持ちの村内先生は、つかえつかえに、こうおっしゃった。「先生は、一人ぼっちの、子の、そばにいる、もう一人の、一人ぼっちになりたいんだ。だから、先生は、先生をやってるんだ」「一人ぼっちが二人いれば、それはもう、一人ぼっちじゃないんじゃないか」。先生は難しい言葉など使わなかった。道理も説かなかった。ただ、目の前にいる一人ぼっちを励ますために必死に言葉を紡いでくださった。その真摯な姿に私は感動した。

次の学期に私はクラスのグループワークで周りに話しかけてみた。以前は皆の意見に従うだけだったが、今度は自分の意見も言ってみた。「珍しいね、金さんが喋るなんて」。そう言われてちょっと寂しかった。でも、吃音の村内先生だって教壇に立ってがんばっているのだ。どこちなくてもいいから、私もとにかく続けてみようと思った。そしてしばらくすると、違和感も減り、グループワークが面白いなと思いはじめた。初めは真面目に討論していただけのメン

バーとも、いつの間にか楽しくおしゃべりするようになっていた。週末には彼女たちとカラオケや映画にも行った。まるで小学校のころに戻ったような気分だった。久しぶりだな、この気持ち。一生かかっても取り戻せないと思っていたのに。

季節は12月に入った。日本語学科では毎年、先生方や留学生を100人以上招待して忘年会を行う。その一大イベントで、私は勇気を出して司会に挑戦した。以前の私からは想像もできない挑戦、未知の世界だった。当日は自分が何を言ったのかもわからないほど緊張していた。しかし、あちこちから「金さん、がんばれ!」「すごい!アナウンサーみたい!」といった声が聞こえた。半年前には誰も話しかけてくれなかったのに、今は皆に囲まれて、応援され、祝福されている。私は嬉しくて恥ずかしくて、思わず手を顔につけた。久しぶりに自分の素肌に触れたような気がした。私はもう一人ぼっちじゃない。

村内先生に会えてよかった。ぜひ先生に「ありがとう」ございます。友達ができました」と笑顔で報告したい……。のだが実は、先生に直接会うことはできない。というのも、村内先生は私が初めて日本語で読みきった重松清の『青い鳥』という小説の登場人物だからだ。でも、村内先生は私の心の中に確かに存在している。村内先生は私にとって、日本語を勉強したからこそ出会えた、そして、私を変えて

2017年(平成29年)3月1日発行(毎月1回1日発行) 通巻524号

ISSN 0288-0377

アジア時報

2017.3

The Asian Affairs
Research Council

分断を深める「二つのアメリカ」
トランプ政権下の米国と世界

渡辺 靖

寄稿

米露の「蜜月」時代は来るか
トランプの誘いに慎重なプーチン

大木 俊治

アジア調査会講演会

トランプ政権誕生の衝撃とその含意

久保 文明・五百旗頭 真

AARC 一般社団法人 アジア調査会 (毎日新聞社内)

くれた大切な恩師なのだ。私はきつと忘れないだろう、村内先生が「もう一人の一人ぼっち」として私を支えてくださったあの夏の日を。

(指導教師大工原勇人)

金昭延(きん・しょうえん) 1996年、吉林省出身。中国人民大学日本語学科2年。この作文コンクールへの参加は今回が初めて。交換留学で約半年間、日本で過ごしたことが、日本に対する関心を深めたという。今回の受賞については「指導教師の大工原勇人先生をはじめ、日本語学科の先生方による日ごろの教えや励ましのおかげ。今後さらに日本語レベルが向上するよう、日本語(学習)そのものを楽しみながら、前を向いて頑張っていきたい」。趣味は、旅行。

